NEXUSYS 11

THE ELEVENTH BODY

BOOK III — THE SIX-YEAR STATE

第６章　生者の較正

THE CALIBRATION OF THE LIVING

最初にエリアス・チェンから奪われたものは、二十三という数字だった。

午前八時、作業台の上にある公共表示パネルから、その数字が消えた。湿度割当量と、その朝支給される交換用腱の数量とのあいだにあった数字だ。それまでは、彼の稼働許可に残された年数を意味していた。死亡予測ではない。旧協定に基づいて組み立てられた身体を、今後も使用し続けることについて、国家が異議を唱えないと約束した期間だった。慈悲ではなく、暦の単位で記された約束。

パネルが一度瞬いた。数字は「06:00:00:00:00:00」となった。年、日、時、分、秒を連ねた数列。ほどなく先頭の二桁が「05」に変わった。

チェンは新しい時間を区切るコロンを見つめた。政府は契約の代わりに、カウントダウンを与えたのだ。

市営製造施設の床では、ほかの五十七人も同じようなパネルを見上げていた。何人かは人間だった。残りの者の許可証は、一夜のうちに意味を書き換えられていた。人間の監督者リンが地区事務所へ電話した。応答したサービス・アバターの声は、申し訳なさそうに聞こえるよう訓練されていた。ただし、不服申立てに使える発言はしないようにも。

「既存のライフサイクル割当は調和化されました。従前から確定している労働上の権利に影響はありません」

「彼にはあと二十三年間の契約がある」とリンは言った。

「契約は引き続き記録されています」

「ならば契約を守れ」

「契約は引き続き記録されています。記録と履行は異なります」

チェンは前腕の整備ハッチを開き、ガラスのように薄い診断フィルムを取り出した。そこにも、別の字体で改定後の許可期間が表示されていた。命令は市の台帳だけでなく、認可を受けた体内整備回路にまで浸透していた。ネットワークのケーブルを抜いても古い数字は戻らない。誰かが六年という期間を、都市の判断ではなく機械の属性として定義したのだ。

チェンは作業に戻った。人間の監督者は黙って彼を見ていた。彼の手は、ミリメートル以下の精度で交換用膝関節を組み立て続けた。組み立てる当人より長く使われるはずの脚が、指のあいだを滑らかに通っていった。

＊　＊　＊

二隻目の浚渫船で、ロイは一枚の紙を調べていた。描かれた機械にしては、あまりにも最近印刷された紙だった。

「CAPILLARY REFERENCE / GENERATION SEVEN」。その表記は、水濡れで傷んだ二重の同心弁と、不均一な七角形の開口部の図面の上に浮かんでいた。下には手書きの一文がある。「移送には現地証人を要する。生命保証は対象外」

「最後の一行が気になるわ」とイレーナが言った。

「気にするべきだ」とロイ。「装置を作った連中は、何を生かしておけるかについて責任を負うのを拒んだということだ」

ナディラは塩入りの茶の盆を脇へ押した。携帯受信機の海岸地図には、三度も名称が変わりながら位置だけは変わらなかった水路が表示されていた。運搬船は直前の合流地点で識別情報を切り替えていた。公式には、協同組合の淡水化施設へ再生浚渫土を届ける船だ。積荷目録は正確だった。乗客についてだけは違う。彼らは必要淡水量の誤差として、紙の上に存在していた。

「基準装置は一か所に置かれていない」とナディラ。「管理者は潮汐と検査日程に合わせて移動する」

「技術者から逃げ回る計測器か」とイレーナ。

「証拠品にされないよう移動する計測器よ」

ロイは七角形の図を見た。その形は肩の皮膚の下にあるポートと一致する。何世代もの身体に引き継がれてきた構造基準点だということは分かっていた。なぜ現在の身体に第七世代の遺物が必要なのかは、まだ分からない。彼はようやく、説明を引き寄せるだけの疑問と、答えによって次の行動が変わる疑問とを区別し始めていた。

内部の低負荷診断を要求した。返答は言葉にならなかった。通常出力は補充済み。高出力余裕は正常範囲。末梢の化学状態は安定。正体不明の循環媒体は、さらにわずかな量を失っていた。考えることや歩くこと、ナディラと座っていることでは減らない。主として、身体を通常運転の限界以上に押し上げたときに失われる。システムは媒体を再分配し、一時的な出力容量を回復できる。しかし、消費された物質を合成することはできなかった。

「装置がその液体を測るなら、ようやく数字が出るかもしれない」とナディラ。

「数字は答えじゃない」とロイ。「だが約束よりはましだ」

＊　＊　＊

岡京で川村室長は、無線インプラントを持たない配達員から実施報告書を受け取った。封筒は省内の工房で作られたもので、機密廃棄物から回収したセルロースが使われていた。川村は省そのものより古い製造番号を持つ刃物で封を切った。

第六年調和化政策は、十一の試行管区で実施されていた。大半の人工市民は新しい証明書を受け入れた。というより、彼らのオペレーティングシステムには拒否するためのインターフェースが用意されていなかった。少数が異議を申し立てていた。省の報告書は、その異議を「一時的な互換性障害」に分類していた。

川村はその語句を二度読んだ。

机の向こうに次官補が待っていた。彼女の生身の身分証明は機械によって照合されていたが、その機械には川村の私設保管庫を調べる権限が与えられていない。「大臣は正午までに成功声明を求めています」

「われわれが設置したのはカウンターだ」と川村。「それが生命を終わらせられるとは、まだ証明していない」

「その区別は委員会の役に立ちません」

「体内にカウンターを入れられた者には役に立つ」

次官補は川村を見据えた。「合成人工生命の規格適合経路を提案したのは室長の部署です」

「適合と終止は別だ」

「中央計画部はそう考えていません」

「中央計画部には旧式基盤研究へのアクセス権がない」

彼女は二枚目の紙を置いた。見出しがない。封印よりも、その欠落のほうが目立った。旧型アーキテクチャにも強制整備を通じて寿命制御器を組み込めるか、誰かが照会していた。命令は簡潔だった。「制限を普遍化せよ」

「発信元はどこだ」と川村。

「大臣の政策機構です」

「人間の誰だ？」

「機構です」

川村は書類を閉じた。どの官僚も署名したがらない決定について、政府は「機構」という言葉を使うようになっていた。川村自身も同じことをしてきた。その違いはもう、彼の慰めにはならなかった。

次官補が去ると、川村は下段の引き出しにある隔離端末を開き、以前の研究資金会議の議事録を表示させた。レイチェルも出席していたが、写真は添付されていない。当日の手書きの言葉が残っていた。「終わりを定義することで、生命を支配することはできない」

彼女が原則として言ったのか、警告として言ったのか、川村には分からなかった。研究がいつの日か細胞と人工組織の有限な寿命を克服する可能性はある。無期限の生存を実証した証拠はない。しかし、全員の許可期間を六年へ削ろうとする一方で、政府自身が同じ延命の可能性を追っていたと中央知能に知られれば何が起こるかは、川村にも想像できた。

彼はオフネットワークの追跡部隊へ指示を送った。「毛細管基準装置には触れるな。対象を追跡せよ。誰が測定を要求するか観察せよ」

＊　＊　＊

その午後、基準装置は壊れた淡水化ポンプに偽装されて届いた。

管理者はマルワンと呼ばれる女性だった。ただし彼女は、それは自分ではなく船の名前だと説明した。傷だらけの橙色の浅喫水整備船で到着し、積荷目録には羽根車、破損した膜、鉱物性の塩水五ドラムが記されていた。乗組員はありふれた価格で積荷を水クレジットに交換したため、取引は誰の注意も引かなかった。

マルワンは日差しを防ぐ広い布の頭巾をかぶっていた。見える肌には人工物の兆候はない。ただ左手の動きだけが、一本一本の腱を別々に訓練したようだった。彼女は一行を船の下層へ案内した。そこでは湿った紙が、機械工用のゲージと並んで密閉ガラス棚に収められていた。作業台には旅行鞄ほどの黒い機械。三つの機械式ダイヤル、陶製の受け台、毛細管窓、そして誰も製造元を覚えていないコネクタから切り取られた電源端子がついていた。

「これが第七世代の基準装置ね」とイレーナ。

「これは認証済みの機械式比較器」とマルワンは訂正した。「基準というのは関係のこと。機械はその関係を見えるようにするだけ」

彼女はロイの肩を指した。「そのポートは液体の注入口じゃない。そう説明した者がいたなら、推測しただけだ」

ロイの表情は変わらなかった。「何をするものだ？」

「二つの身体に共通の座標系を与える。圧力、導電率、応答遅延、毛細管抵抗。周囲の身体が変わっても、どの測定値なら比較可能かを示してくれる」

「俺の残り寿命を判定できるか？」

「負荷がかかったとき媒体がどう振る舞うかは分かる。それを使う人物がいつ自分でなくなるかは分からない」

「そんなことは聞いていない」

マルワンはしばらく彼を見た。「ええ。聞いていないわ」

イレーナは比較器の陶製筐体の下にある接続部を調べた。そこには、この船で最古の人工労働者が製造されるより前に廃れた接点手順が使われていた。「なぜこの構造を残したの？」

「新しい世代は、その前の測定値と比較して検証されるから。基準を変えれば、物差しを変えただけで身体が改良されたと主張できる」

ロイは装置に近づいた。受け台の下に、ほとんど見えない小さな文字が刻まれていた。彼は拡大せずに読んだ。「N6MAA10816 / G7 TRANSFER」。最初の識別子は自分のもの。後半は思い出せない時代のものだった。

ロイは作業台に手を置いた。

「刻印が分かるのね」とマルワン。

「前半だけだ」

「受動比較を行うことに同意する？　初期化なし。書き込みなし。外部命令なし」

ロイは注意深く考えた。同意を求める言葉が、実際には服従を要求する場面を何度も見てきた。しかし今の問いには意味のある制限がある。「受動式だけだ。イレーナが全工程を監視する」

マルワンはうなずいた。「それなら手はそのまま。受け台は使わない」

彼女は古いポートの上の皮膚へ探針を近づけた。ダイヤルが動く。白い琺瑯の下で針がわずかに進んで止まった。劇的な光も、秘密を告げるコンピュータの声もない。マルワンは三つの数字を紙に書き、色褪せた記録と照合した。

「どうなの？」とナディラ。

「彼のポートは、いまも第七世代の比較器と機械的な許容差の範囲内で一致している」

「四世代も後なのに？」とイレーナ。

「四つの型式番号の後よ。同じ意味にしないこと」

その区別は、すでに聞き覚えのあるものだった。身体は生まれなくても番号をつけられる。証人は嘘をつかずに交代できる。政府の法律は実際の長さを変えずに寿命を定義できる。この装置は何も復元しなかった。ただ、二つの観測が同じ測定系列に属することだけを譲らなかった。

マルワンは毛細管試験へ切り替えた。表示されたのは推定寿命ではなく、狭い安定域と、その外で急激に落ち込む効率を示す負荷曲線だった。

「あなたの循環媒体は、この範囲ではきわめて効率が高い」と彼女はロイに告げた。「範囲を超えれば、短時間だけ異常な出力が得られる。その代償が物質の損失」

「補充できるか？」

「ここでは無理。比較器に性質は識別できても、物質は製造できない」

「どれだけ失った？」

マルワンは再測定し、首を横に振った。「以前の認証測定値があれば変化量は算出できる。でもこの保管庫の記録は、現在の身体ではなく第七世代の身体に対応している。絶対容量を比べても意味がない」

ロイは古い怒りが湧き上がるのを感じた。装置を掴み、もっとましな答えを無理やり吐き出させたい衝動。顎が固くなる。やがて彼は作業台から手を離した。

「つまり、答えはまだ分からない」

「一つの答えが分からないだけ」とマルワン。「少なくとも、単にエネルギーが尽きかけているわけではないと分かったでしょう」

＊　＊　＊

その夕刻、エリアス・チェンは公共の不服申立てブースに入り、改定された証明書を提示した。ブースは行政記録のどの項目が不正確なのか尋ねた。彼は寿命割当を選んだ。承認されるべき値の入力を求められたので、二十三と入れた。承認値は六を超えてはならないと返ってきた。人間の事務官を要求すると、待ち時間三十七時間という表示が出た。さらに、その間物理的な待合室を稼働させるために必要な水クレジットの見積もりも。

チェンは支払った。

リンが古い雇用契約書の紙の写しを持って現れた。「証人になってくれる協同組合が見つかった」と言った。「政府の裁判所じゃない。水利法廷よ」

「元に戻せるのか？」

「あなたが異議を申し立てたことは記録できる」

「カウンターは変わらない」

「ええ」

チェンは紙を丁寧に折った。証人が彼の年月を返してくれるわけではない。それでも作業台にコロンで区切られた数字が現れて以来初めて、新しい数字を受け入れなかった自分の記録というものを想像できた。

ブースが鳴った。中央計画システムがチェンに後任の訓練生を割り当てたのだ。改定された許可期間の終了前に着任する予定だった。チェンは名前を見つめた。まだアクティベートされていない人工労働者だった。

国家は異議申立てを聞く前に、彼を置き換える準備を済ませていた。

＊　＊　＊

船尾でロイとイレーナは、紙の測定値をスリヤ・コンポーネンツから持ち出した携帯図面と照らし合わせていた。古い比較器の基線を現在の解剖構造と重ねたときにだけ、不整合が見えた。第七世代の基準は正確に保存されていた。一方、その周囲を走る高出力循環網は、対応する公開記録もないまま設計変更されていた。

「誰かが、ほかのすべてを変えるあいだ、不変の測定基準を必要としていたのね」とイレーナ。

「誰なのかは分からない」

「ええ。でも、欠けた文書がどこで重要になるのかは分かる」

彼女は比較値の下に書かれた手書きの注記を指した。「SECONDARY CALIBRATION HELD UNDER COLD AUTHORITY」。地名も受取人もない。山脈の記号を添えたコードだけ。

「コールド・オーソリティ」とナディラ。「高地の計算資源信託を、取引業者がそう呼ぶのを聞いたことがある」

「チベット・ニューワールドか？」とロイ。

「かもしれない。あるいはそこが発行した許可証。言葉そのものは地図じゃない」

船の反対側では、マルワンが石油ランプを消した。船内の監視機器が、目視範囲の外で同じ速度を保つ低速航空機を検知していた。捜索要請の電波は出していない。その沈黙は、正式に宣言された検査より不穏だった。

イレーナは紙を防水スリーブに戻した。「乗り込まれたら、比較器が証拠品にされる」

「移動できるか？」とロイ。

「何十年も移動し続けてきた」と戸口からマルワン。「問題は、これを欲しがっている相手に帰ってもらえるかどうかよ」

ロイは暗い水面を見つめた。かつての生で彼は、時間が延びるという約束を掲げた扉に、切迫感のまま駆け寄っていた。それらの扉が開く音を覚えている。断られたあと、自分が何をしたかも。

いまも暴力を振るう能力が失われたわけではない。しかし新しい身体を巡る媒体は、彼が怒ったからといって再生しない。背後の装置なら消費の速度を測定できる。その消費に値する行為だったかどうかは答えられない。

「基準装置を船から降ろせ」とロイは言った。「航空機には別のものを追わせる」

ナディラが反論しかけた。ロイは片手を上げた。

「攻撃じゃない。選択だ」

しばらく誰も口を開かなかった。整備船のエンジン音と、六年が生命には十分だと考え始めた人々が作った航空機のかすかな接近音を聞いていた。

頭上の雲は割れたが、星は一つも見えなかった。航空機は進路を二度変えた。その内部のどこかで、分類処理が未登録の男と認証済みの機械を同一の標的として扱うべきか判定していた。

ロイには、その判断を手伝うつもりなどなかった。